ヒューマンウェアインターンシップ報告書

インターンシップ体験記　（海外インターンシップの場合は英語で記入）

【はじめに】
本体験記は、工学系博士後期課程の学生(専門はコミュニケーションロボット)が参加した、国内教育系企業(以下、インターン先企業と記述)における短期(5 週間)のインターンに関するものである。本体験記は、今後インターンを実施する学生のための参考資料としての側面をもつ。そこで、体験記とはあるが、研修内容をこと細かく記述するよりは、むしろそこから得た学びや今後のインターン実施者に有用と考えられる情報を提供することを重視して記述することとする。具体的には、研修内容の概要、インターン実現までの流れを簡単に述べてから、そこから得た学びについて述べる。

【インターンシップ研修内容の概要】
工学系博士後期課程の学生(専門はコミュニケーションロボット)が国内教育系企業において 5 週間の研究開発インターン(大まかなスケジュールについては図 1 を参照)を行なった。社員の方との議論や外部研究機関の訪問(フィールドワーク)を通じて、教育研究に関する知識を蓄えた。それらの経験を基に、教育デジタルアプリの研究開発を行い、3 つのプロトタイプを開発した。最終成果報告会で、開発物についてプレゼンし、実用性や改善案に関してフィードバックをいただいた。総じて非常に密度濃く有意義な 5 週間であった。

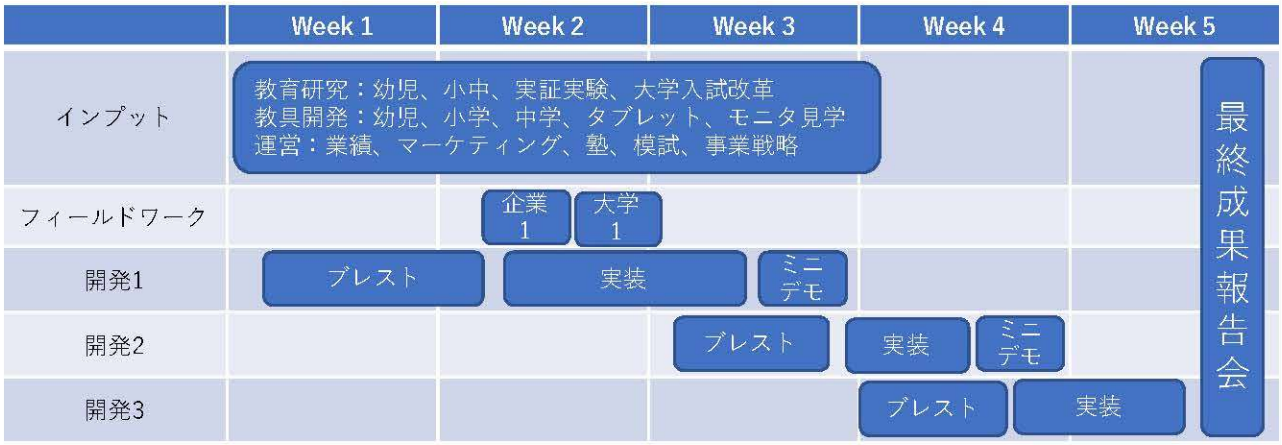

図 1 インターン中に行ったこと

【インターン実現までの流れ】
実現までの流れを一つの参考事例として記載しておく

1. 教育系企業でインターンがしたいと漠然と考える。国内外のベンチャー、企業でのインターンを検討し、面接なども受けるがテーマが合う場所は結局見つからず(M1, 12 月~)
2. ヒューマンウェアアドバイザリ委員会で、指導教員に具体的な行きたい企業の候補を挙げながら相談し、今回のインターン先企業を勧められるが、指導教員から社員の方に連絡してもらったところ「インターンの枠組みがなく難しそう」と返事をもらいペンディング(D1, 6 月)。
3. 他の企業に行くことも考えつつインターン先を探していたら、とあるワークショップの懇親会で産学共創本部の人と知り合いになり、協力を仰げることに(D1, 10 月)
4. 産学共創本部から子会社経由でインターン先企業の人事の方にコンタクトをとる(D1, 12 月)
5. インターン先の企業の方と 3,4 回程度面談を行い、受け入れ決定(D2, 4 月)

【インターンから得た学び】
(1)準備期間中に学んだこと、遭遇した課題
「インターンに行きたい」と口にすることの重要性
インターンのチャンスはどこに転がっているかわからない。本事例のように本来その枠組がない企業でもインターンが人づてに実現する場合もある。インターンに行きたいけれど初手の動き方を迷っているという方は、とりあえず指導教員や産学共創本部に相談するところから始めてみたら良い。

ヒューマンウェアインターンシップ報告書

インターンシップ体験記　（続き）

産学共創本部

今回のインターン実現にあたって、産学共創本部にかなり世話になった。産学共創本部は阪大生のインターン先を探すことなどに協力してくれる機関だが、多くの学生インターンを実現させることが共創本部自体の業績にもなるため、本当に親身に協力してもらえる。漠然とした動機しかなくてもヒアリングから徐々に話を詰められるので、気楽に連絡をとってみることを勧める。

研究室との知的財産権のすり合わせ、契約の形態について

企業とインターンを行う場合、研究室との知的財産の衝突を避けるため、可能であれば、①研究室のテーマと全く関係ない分野でインターンを行う、②企業に提案されたテーマ、手法に沿ってインターンを行う、③共同研究契約を結ぶ、のどれかの形態で行うことが望ましい。今回は「もとの研究室とやっている内容が近く、共同研究ではなく、報告者主導の課題提案型」インターンだったため、所属研究室の指導教員、社員の双方に相談し、干渉が起きないよう注意を払う必要があった。

また今回、(有給の)雇用契約か(無給の)インターン契約のどちらがいいのかについて考えさせれた。インターン契約だと大学が間に入って交渉をしてくれ、知財などに関して学生個人の権利を主張しやすいが、無給(=雇用契約なし)でやらせてもらえることには限りがある。一方で、雇用契約にすると業務に深く関われる可能性が高いが、業務中の発明に関して学生が主張できる範囲はほぼゼロになる。今回は企業側にインターン契約の枠組みがなく選択肢がなかったことと、報告者のメインの目的が企業での就労経験を積むことと知識の収集だったことから、今後、専門研究を進める上で不都合が起きないことを十分に確認し、納得の上で、雇用契約となった。

(2)インターンシップの目的や得た知識

目的：①教育系の知識を吸収する、②現場の開発経験を積む、③人脈を広げる

得た知識(番号は目的と対応)：

① 年代(幼児、小学校、中学校、高校、大学)ごとの各研究開発分野(実態調査、実証研究、教具、教材など)に関して各々の専門家から細かく学べた。このように体系的に教育を学べたのは大手教育系企業に行ったからこその経験であった。

② 開発はアイデア出しから実装まで報告者主導で行ったが、教育の専門家からのフィードバックを即座に受けられる環境にいることで、効率的に進められた。ブレスト->実装->ブレスト->…という研究開発の流れは企業でも研究でも変わらなかったが、「なるべく多くの人が使えるかどうか」を意識しながら研究開発を進める点は企業ならではであった。

③ 少なくとも 30 名以上の社員の方と連絡先を交換し、人脈を作ることができた。さらに、メンターから紹介を受けた元社員・現阪大教授の先生を紹介していただき、その先生にアポをとってお会いし、更にまた知り合いを紹介していただくなど、少しずつ拡大することもできている。こうした人脈は報告者の研究・キャリア双方にとって何にも代えがたい収穫であった。

(3)その他

同僚・上司・教員とのとコミュニケーション

報告・連絡・相談(報連相)はとにかく重要である。特に企業でインターンを行う場合、上述のように知的財産絡みの問題が生じることもあるので、研究室だけの常識で判断せず、社員、指導教員の双方と事前に相談しておくことが大切である。

今回の経験をどう生かすか

本インターンで得た教育の体系的な知識やアプリ開発の技能は専門研究における課題設定・開発でもすぐに生かせるものである。また今回築かれた人間関係を絶やすことなく広げることで、研究議論の発展やキャリア形成に役立てていきたい。

週末の活動を含め、宿泊、食事、治安、物価などの現地での日々の生活について

職場の側にウィークリーマンションを借りて生活した。食事は、朝は無しかフレークなど、昼は社食、夜は飲み会がなければ自炊。治安、物価などに関しては国内なので特にギャップはなかった。

インターンシップにおける積極的な活動から博士人材として自らが成長できたと思うこと

自己アピール力(自分の短所・長所を理解してもらい適切なアドバイスを引き出す力)が高まった。基本的には「大事なことから話す」ということに尽きるが、自分のバックグラウンドを知らない人のもとで１ヶ月で成果を出すためにそれを自然と意識して繰り返すことで、対話能力が高まった。